



熊野古道なかへち美術館蔵 佐伯祐三「海の響き」

平成30年度展覧会案内

1. 熊野古道なかへち美術館開館20周年記念展 I
渡瀬凌雲〜渡米の前後で〜
熊野古道なかへち美術館の開館20周年を記念して、父祖が田辺市中辺路町の出身である昭和の前期画家・渡瀬凌雲（1904―1980）の画家を、渡米の前後に焦点を当てて振り返ります。
2. 特別展 現代の鏡 II 朝倉美津子
現代の優れた鏡の造形を紹介するシリーズの3回目として、1970年代の初めから現在に至るまで、独創的な技法で「ガラス」の表現を拓け続けている、朝倉美津子（1950― ）の作品を展覧します。
3. 熊野瀨晚花〜国画創作協会の画家たちとともに〜
熊野古道なかへち美術館の開館20周年を記念して、田辺市中辺路町出身で主に大正期に活躍した日本画家・野長瀬晚花（1889―1964）の表現を国画創作協会の画家たちとともに振り返ります。
4. 小企画展 佐伯祐三と近代の洋画
30歳の若さで「U」に没した洋画家、佐伯祐三（1898―1928）の作品を、主として1920年代後半30年代前半の作品を中心に展示し、同時代の洋画家たちの制作とともに紹介します。
5. 特別展 生涯110年記念 秋野不矩展
晩後間もなくに創造美術（現在の創造会）を結成して、日本画の世界を新しい時代のものとしていった画家たちの活動を回顧するシリーズとして、生涯110年を迎える秋野不矩（1908―2001）の美術を紹介し、

28年

1. 開館20周年なかへちコリジョン特別公開 I 晩花と凌雲
熊野古道なかへち美術館の開館20周年を記念して、「田中辺路町立熊野古道なかへち美術館コリジョン」（なかへちコリジョン）から野長瀬晚花（1889―1964）と渡瀬凌雲（1904―1980）の作品を無料で特別公開します。
2. 開館20周年なかへちコリジョン特別公開 II 雑賀清子
熊野古道なかへち美術館の開館20周年を記念して、「田中辺路町立熊野古道なかへち美術館コリジョン」（なかへちコリジョン）から雑賀清子（1933―2017）の作品を無料で特別公開します。
3. 開館20周年記念特別展 鈴木昭男 一内 在（na i za i）ー
「ナ」の先駆者であり、音と場について独自の探究を続けて国際的に活躍する鈴木昭男（1941― ）の現在を紹介します。「音の円在」をテーマとした新作を美術館外に設置します。



鈴木昭男肖像

平成30年度展覧会案内

REPORT 連続講座『森と芸術』

田辺市立美術館では、「森」を私たちの住むこの地の重要なシンボルととらえ、その「森」をテーマとした展覧会や催しを、主に熊野古道なかへち美術館（田辺市立美術館分館）を会場にして重ねてきました。今年、熊野古道なかへち美術館が開館20周年を迎えるにあたり、より広範に「森と芸術」の関係を探りたいと考え、図書館とも連携して企画を検討し、「文学」、「美術」、「音楽」それぞれの分野で「森」との関わりが深い作品を制作している芸術家を招いて、自身の制作とそれを通して考える森の魅力について話をうかがう、連続講座『森と芸術』を開催することにしました。

最初の講座「森×俳句」は、和歌山市出身の俳人、堀本裕樹さんをお招きして3月3日（土）に田辺市文化交流センター「たなべる」で開催しました。堀本さんの両親は田辺市本宮町の生まれで、その縁で幼いころから度々当地に遊び、熊野の森に寄せる特別な思いから、代表作となっている句集『熊野曼荼羅』が編まれています。

講座は、堀本さんが事前に選んだ森をテーマとする古今の俳句10句の中から、参加者が好きな3句を選び、その理由を述べあう句会形式で行われました。俳句の作者は伏せられた状態で提示され、参加者は自分の選んだ句について、自由にその情景を思い浮かべたり、自身の森での体験を重ね合わせたりしながら、それぞれの感想を述べあい、その後、堀本さんから解説がなされました。俳句を趣味にされている方から初歩の方まで、なごやかな雰囲気の中で、俳句のなかの森の表現について学ぶことが出来ました。

翌週の3月10日（土）には、彫刻家の土屋仁応さんに田辺市立美術館へお越しいただいて、第二回の講座「森×彫刻」を開催しました。土屋さんは、東京藝術大学の大学院で学んだ仏教美術に用いられている古典技法やその修復の技術を応用して、櫓や樟を素材に、馬、羊といった動物や、ユニコーン（一角獣）、麒麟、人魚などの幻獣をモチーフとした作品を、森の木々の声を聞くようにしながら制作しています。

土屋さんの講座は、『森』と題した自身の作品についての話から始まりました。土屋さんは、森は人間が意識している理性的な世界に対して、無意識の世界を示すものと考え、「その境界線を行き来するような作品をつくりたかった」という制作の動機を披露してくれました。その後もこれまでの作品を図版で示しながら自身の表現について話され、最後には参加者からの質問への応答も活発になされました。また特別に鹿の小作品を持参してくださり、参加者は会場で実際に作品に接する機会を得ることもできました。

『森と芸術』の最終講座、3月24日（土）に熊野古道なかへち美術館で開催した作曲家の小松正史さんによる「森×音」については、次号でお伝えしたいと思います。楽しみにしてください。

今回の企画をよく理解してくださり、貴重な時間をつくっていただきました三名の講師の方々、熱心にご参加いただいた皆様（学芸員 知野 季里穂）に心からの御礼を申し上げます。

田辺市立美術館への気持ち⑬

今年2月5日に東京で開かれた全国美術館会議の企画委員会と理事会を終え、ついでに諸々の展覧会を駆けめぐって帰途に就いた2月8日、毎日新聞の夕刊を読んでいると、昨年12月の全国美術館会議小規模館研究部会第46回研修会でお世話になった新宮市立佐藤春夫記念館長、辻本雄一さんの寄稿記事を目にした。

「博愛唱えた刑死者『大逆事件』の大石誠之助 名誉市民に」と題する文は、大逆事件により処刑された新宮出身の「ドクトル大石」に新宮市から名誉市民の称号が与えられ、いわれなき罪の名誉が回復されただけでなく、佐藤春夫、西村伊作、中上健次らを生み出した熊野の精神的な先覚者としての存在を再評価しようとする動向を語り、この機に大石誠之助と大逆事件をしっかりと記憶にとどめることが肝要であると結んでいる。私は、このエッセイを読んで、改めて大逆事件に思いを馳せたが、そのことよりも「熊野」という地の精神の骨格を築いた人、大石誠之助に対する辻本さんの親愛の情を深く汲み取った。そして、『佐藤春夫記念館だより』から垣間見ていた文学館としての堅実な歩みの中にある、一つの輝きを改めて認め、少し嬉しくなった。

個人名を冠した文学館の運営の困難さは、個人美術館の厳しさを遙かに超えるものである。その中で、先の研修会のテーマ「美術館と文学館との連携」でうかがった佐藤春夫記念館や軽井沢高原文庫のさまざまな地道な取り組みとその成果に接し、ただ入館者を増やすことだけにあたふたとしている美術館の日常に、もう一度、わが館の存立の意義を正すべき時にあると痛感した。少ないと嘆く予算、乏しいと感じる蔵作品を生かす道は、美術館にはもっとある。何よりも拠って立つ地の財産を掘り返して再生する可能性を持ち、その責務を負っていることを、美術館はしっかりと受け止めなければならない。とりわけ、私たち小規模館においては、



昨年の小規模館研究部会会合にて

さて、田辺市立美術館も属する小規模館研究部会の

会合は、以前のワーキンググループの時代から46回に至る、20年を超える歴史がある。発足以前、全国美術館会議の総会に出るたびに感じた、大規模館の現状や課題との大きな隔たり、研究や展覧会に専念できない「雑芸員」と呼ばれる現実など、もっと現状に即した話し合いの場を設けられないかという素朴な声により、この会は始まった。公立、私立を問わず、また建物の大きさやスタッフの人数を問わず、小規模館だと自認する館が集まり、現在では50館を超える組織になっている。

田辺市立美術館は、2005（平成17）年の市町村合併以前、現在分館となっている熊野古道なかへち美術館が先行してこの小規模館の会合に参加し、2年前からは幹事を担っている。私にとり、田辺の地は殊の外思い入れの強い場所である。国画創作協会（国展）の創立会員の一人、野長瀬晚花が中辺路の出身であること、国展の作家が多くこの地を訪れ作品を描いていること、入江波光や村上華岳など国展関係の作品を田辺市立美術館が多く所蔵すること、また小野竹喬の妻が隣町白浜の生まれということなどもあり、私は田辺に足繫く通わせていただいている。

その都度、田辺市立美術館に立ち寄り、よもやま話をする。最近は、小規模館研究部会のあり方について、「成果を生み出すことを第一に、理想ではなく現実的に動くべきだ」という討論を語った。先の研修会のテーマ「美術館と文学館との連携」についても、成果として共同の企画展を生み出すことを念頭に置いたが、いささか認識不足であった。田辺市立美術館が開催した「詩人たちの絵画」展に、すでに佐藤春夫記念館や軽井沢高原文庫などが所蔵する絵画資料が活用され、両者の連携は密に動き始めていた。また研修会の事例発表を通して、文学館における美術作品の展示、美術館における文学資料の活用が、私が捉えていた以上に功を奏していることを知った。いずれの美術館も文学館も地に足の着いた堅実な取り組みがなされていた。いかに鄙な地の美術館であれ、文学館であれ、自館の財産を知り、目指すべきことに地道に取り組めば、自ずと活路が開かれることを、このたびの研修会を通して再認識した。そして今は、この研修会に参加した各館が次にどのような札を切って、美術と文学の交わりを高めてゆくのか、ワクワクと高揚した気分が包まれているところである。（笠岡市立竹喬美術館館長 上園 四郎）

編集後記

今年度は熊野古道なかへち美術館が開館から20周年を迎える年です。本館・分館とも記念の展覧会やイベントを盛りだくさんに計画していますので、今号の特集や折込の「展覧会案内」をご覧ください。今後もホームページや次号でご紹介していきます。私もスタッフの一員として頑張りたいと思います。

（F.O.）



感想を話しあう堀本裕樹さんと参加者



自作の《森》について話す土屋仁応さん

（学芸員 知野 季里穂）

田辺市立美術館NEWS

ORANGE
Vol.28

久保田繁雄《Echo of The Ocean XII》 2015（平成27）年

田辺市立美術館蔵

「Echo of The Ocean」シリーズについて

私の作品には様々なタイプがありますが、1980年代中頃から90年代にかけて制作した「Echo of The Ocean」や近年の「Bright Forest」のシリーズは、自然の中に感じる情景、波の動きや音、木々のざわめきや響き合い、風の音といったイメージをインスピレーションの源としています。自然と戯れながら光の反射や陰影を利用して、反復からハーモニーを生み出すことを考えています。

《Echo of The Ocean XII》は、海原の洋々と波立つ様を表わそうとした「Echo of The Ocean」シリーズをもう一度振り返ってみたいと思って2015年に制作したもので、特にサーモンピンクと緑との色彩の対比を意識しています。生成りで織られた波の線の部分は、太陽の光線が差し込む雰囲気表現できていると思っています。

制作は、作品の素材となるフィリピン産のサイザル麻の原糸を熱湯でよく洗って繊維の油脂分を取り除くことから始めます。次に洗った大量の繊維を化学染料で自分のイメージの色に染め分けます。そして染めた繊維を束ねたものを、西陣の手織り機で帯状に織り、計画的に工業用ミシンと手縫いで縫製し、構造化してレリーフ状の形を作り出します。サイザル麻が持つ力強さや光沢などを活かすことのできる、素材と色彩と形の関係が最も重要な課題と考えています。

今後も織という技法を通してのみ表現可能な、ダイナミックな造形作品を作り続け、素材、色彩、技術を駆使することで独自の世界を創り出したいと思っています。

（久保田 繁雄）

※今回特別に作者の久保田繁雄氏より自作についてのご寄稿をいただきました。

